

福島と福井の交流会



気になることを  
質問してね!

# 原発事故避難者と医師を迎えて

福島原発事故の避難民で、2018年に檜葉町に戻って故郷を取り戻す活動を展開中の佐藤龍彦さんにお出でいただきます。チェルノブイの被災者支援の活動を続けながら低レベル放射線の遺伝的影響を研究され、毎月、福島に出向いて外来診療を行っている振津かつみ医師も一緒に来られます。お二人から福島現状を学びみなさんと交流したいと思います。

日時: 2023年4月22日(土) 午後1時30分~4時45分

場所: 市民プラザ武生/多目的室2 (JR武生駅アルプラザ3階)

※平和堂に駐車される方は、受付で駐車券に印をもらってください。

参加費: 200円

主催: サヨナラ原発福井ネットワーク 越前市瓜生町51-2-7 若泉方

電話 090-7083-8921

## ○佐藤龍彦さんのプロフィール

1952年生まれ・71歳、福島県檜葉町在住、母、妻三人暮らし、郵便局退職時に大震災・原発重大事故に遭遇、以降、避難先を転々とし7年後に帰還、現在は「福島原発事故被害から健康と暮らしを守る会」事務局役員の他、町行政区役員を担い故郷を取り戻す活動を展開中。



## ○振津かつみさんのプロフィール



内科医として大阪在住の原爆被爆者の健康管理に携わり、放射線の健康影響を学ぶ。現在、兵庫医科大学・遺伝学教室(非常勤講師)で、放射線の遺伝的影響の研究に取り組む。1991年から「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」創設メンバーとして、毎年ベラルーシのチェルノブイリ被災地を訪問。世界のヒバクシャ問題にも関心を寄せ、核実験被害者、ウラン採掘による被害を受けた米国先住民などと交流を続けている。

2011年3月、福島第一原発の事故発生後の4月以降、毎月福島に通い、被害者の方々健康相談などに取り組む。2016年からは福島市の「きらり健康生協」で外来診療(月2回)を担当する傍ら、国の責任で原発事故被害者の医療・健康保障を行わせるための被害者自身の運動のサポートにも取り組んでいる。

# 7年2ヶ月振りに郷里に戻り…

2019年4月 檜葉町在住 佐藤龍彦

齢60歳の還暦前に起きた大震災・原発事故はささやかな老後の夢を挫きました。退職と同時に避難生活を強いられ避難カ所は実に8回を数えました。その間には、筆舌では表わせない出来事が起こり、その度ごとに「原発事故さえなかったら・・・」と表しようのない怒りが込み上げていました。

檜葉町が避難解除（2015年9月5日）になってから2年余り、釈然としないままに故郷に戻りました。釈然としないとは、加害者である国や東京電力の思惑に乗せられ、被害の実相が忘れ去られる不安にかられたからです。現に事態は思惑どおりに進んでいます。

復興期間10年・避難解除基準20mSv・補償の打ち切りするなど、事は（糊塗）は、イノベーションコースト構想を御旗に、東京オリンピックを前に枕言葉の「復興」を国内外に宣言してフクシマを終わらせようとしています。

腹が立つ。無性にイライラします。被害者を切り捨てる国や東京電力の思惑に乗せられる自分に悔恨がつきまとうからです。しかし・と、どんな選択があったのかとも自問自答します。郷里に戻り1年。息子や孫は戻れない。老いた母親と妻との3人暮らし。妻はまだ働いています。想いと志しはつのりします。「原発事故さえなければ・・・」「故郷を返せ・・・」「原発はもうたくさんだ・・・」志しが日増しに強くなる日々です。

---

## ○ 振津医師のこれまでの仕事



振津さんは、1985年 阪南中央病院（大阪）で、原爆投下40年目に取り組んだ大阪府内に住む被曝者1千人の健康調査に携わりました。1991年には「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」を設立。現地の団体を通じて、国土の1/5が汚染地となったベラルーシの子どもたちを支援。また、2004年からは「ウラン兵器禁止を求める国際連合」(ICBUW) 運営委員、科学チーム員として活動してきました。

2012年ドイツの「フランズモール財団」から、原爆被曝者の健康管理、チェルノブイリ原発事故被災者への支援活動、世界の核被害者＝ヒバクシャと連帯した活動など通じて「核のない未来賞」（教育部門賞）を贈られました。3.11以降は、福島で被災者の医療相談・健康影響調査などに取り組んでいます。

今年の1月、ジュネーブ(国連人権委員会)に出かけ、「日本政府の福島第一原発からの放射能汚染水の海洋方放出方針は、太平洋を共有する人々への人権侵害なので中止すべき」との勧告を、国連加盟の太平洋島嶼国から国連人権委員会で訴えてもらうためのロビー活動を行ってきました。